



森
鷗
外
集

日本文学全集 4



日本文学全集 4 森 鷗外集

昭和四十五年十一月一日発行

著 者 森 鷗外

発行者 竹之内静雄

発行所 株式会社筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二ノ八

電話東京二九一七六五一（代表）

振替東京四一二三

本文整版 株式会社精興社

本文印刷 多田印刷株式会社

製本 和田製本工業株式会社

森鷗外集 目次

雁

五

澀江抽斎

其

舞姫

三五

文づかひ

二五〇

キタ・セクスアリス

二六二

普請中

三三〇

花子

三三五

妄想

三三〇

かのやうに

三四四

興津弥五右衛門の遺書

三六五

阿部一族

三七七

安井夫人

三六

山椒大夫

四二

ぢいさんばあさん

四三

高瀬舟

四九

寒山拾得

四八

冬の王

四五

仮名遣意見

四六

歴史其儘と歴史離れ

四〇

年譜

四四

人と文学

四二

唐木順三

森
鷗
外
集

正道直行竭忠

盡智

歸外源高湛

雁

巻

古い話である。僕は偶然それが明治十三年の出来事だと云ふことを記憶してゐる。どうして年をはつきり覚えてゐるかと云ふと、其頃僕は東京大学の鉄門の真向ひにあつた、上条と云ふ下宿屋に、此話の主人公と壁一つ隔てた隣同士になつて住んでゐたからである。その上条が明治十四年に自火で焼けた時、僕も焼け出された一人であつた。その火事のあつた前年の出来事だと云ふことを、僕は覚えてゐるからである。

上条に下宿してゐるものは大抵医科大学の学生ばかりで、其外は大学の附属病院に通ふ患者なんぞであつた。大抵の下宿屋にも特別に幅を利かせてゐる客があるもので、さう云ふ客は第一金廻りが好く、小氣が利いてゐて、お上さんが箱火鉢を控へて据わつてゐる前の廊下を通るときは、きつと声を掛ける。時々はその箱火鉢の向側にしやがんで、

世間話の一つもする。部屋で酒盛をして、わざ／＼肴を拵へさせたり何かして、お上さんに面倒を見させ、我儘をするやうでゐて、実は帳場に得の附くやうにする。先づさつとかう云ふ性の男が尊敬を受け、それに乘じて威福を擅にする。と云ふのが常である。然るに上条で幅を利かせてゐる、僕の壁隣の男は頗る趣を殊にしてゐた。

此男は岡田と云ふ学生で、僕より一学年若いのだから、兎に角もう卒業に手が届いてゐた。岡田がどんな男だと云ふことを説明するには、その手近な、際立つた性質から語り始めなくてはならない。それは美男だと云ふことである。色の蒼い、ひよろ／＼した美男ではない。血色が好くて、体格ががつしりしてゐた。僕はあんな顔の男を見たことが殆ど無い。強ひて求めれば、大分あの頃から後になつて、僕は青年時代の川上眉山と心安くなつた。あのとう／＼窮境に陥つて悲惨の最期を遂げた文士の川上である。あれの青年時代が一寸岡田に似てゐた。尤も当時競漕の選手になつてゐた岡田は、体格では遙かに川上なんぞに優つてゐたのである。

容貌は其持主を何人にも推薦する。併しそればかりでは下宿屋で幅を利かすことは出来ない。そこで性行はどうかと云ふと、僕は当時岡田程均衡を保つた書生生活をしてゐる男は少からうと思つてゐた。学期毎に試験の点数を争つ

て、特待生を狙ふ勉強家ではない。遣る丈の事をちゃんと遣つて、級の地位より下には下らずに進んで来た。遊ぶ時間は極つて遊ぶ。夕食後に必ず散歩に出て、十時には間違なく帰る。日曜日には舟を漕ぎに行くか、さうでないときは遠足をする。競漕前に選手仲間と向島に泊り込んでゐるとか、暑中休暇に故郷に帰るとかの外は、壁隣の部屋に主人のゐる時刻と、留守になつてゐる時刻とが狂はない。誰でも時計を号砲に合せることを忘れた時には岡田の部屋へ問ひに行く。上条の帳場の時計も折々岡田の懐中時計に挾つて匡されるのである。周囲の人の心には、久しく此男の行動を見てゐればゐる程、あれは信頼すべき男だと云ふ感じが強くなる。上条のお上さんがお世辞を言はない、破格な金遣ひをしない岡田を褒め始めたのは、此信頼に本づいてゐる。それには月々の勘定をきちんとすると云ふ事実が与かつて力あるのは、ことわるまでもない。

「岡田さんを御覧なさい」と云ふ詞が、屢々お上さんの口から出る。

「どうせ僕は岡田君のやうなわけには行かないさ」と先を越して云ふ学生がある。此の如くにして岡田はいつとなく上条の標準的下宿人になつたのである。

岡田の日々の散歩は大抵道筋が極まつてゐた。寂しい無縁坂を降りて、藍染川のお齒黒のやうな水の流れ込む不忍

の池の北側を廻つて、上野の山をぶらつく。それから松源や雁鍋のある広小路、狭い賑やかな仲町を通つて、湯島天神の社内に這入つて、陰気な臭橘寺の角を曲がつて帰る。併し仲町を右へ折れて、無縁坂から帰ることもある。これが一つの道筋である。或る時は大学の中を抜けて赤門に出る。鉄門は早く鎖されるので、患者の出入する長屋門から這入つて抜けるのである。後に其頃の長屋門が取り払はれたので、今春木町から衝き当る処にある、あの新しい黒い門が出来たのである。赤門を出てから本郷通りを歩いて、栗餅の曲擣をしてゐる店の前を通つて、神田明神の境内に這入る。そのころまで目新しかつた目金橋へ降りて、柳原の片側町を少し歩く。それからお成道へ戻つて、狭い西側の横町のどれかを穿つて、矢張臭橘寺の前に出る。これが一つの道筋である。これより外の道筋はめつたに歩かない。

此散歩の途中で、岡田が何をするかと云ふと、ちよいちよい古本屋の店を覗いて歩く位のものであつた。上野広小路と仲町との古本屋は、その頃のが今も二三軒残つてゐる。お成道にも当時その儘の店がある。柳原のは全く廃絶してしまつた。本郷通のは殆ど皆場所も持主も代つてゐる。岡田が赤門から出て右へ曲ることのめつたにないのは、一休森川町は町幅も狭く、窮屈な処であつたからでもあるが、当時古本屋が西側に一軒しかなかつたのも一つの理由であ

つた。

岡田が古本屋を覗くのは、今の詞で云へば、文学趣味があるからであつた。併しまだ新しい小説や脚本は出てゐぬし、抒情詩では子規の俳句や、鉄幹の歌の生れぬ先であつたから、誰でも唐紙に摺つた花月新誌や白紙に摺つた桂林一枝のやうな雑誌を読んで、槐南夢香なんぞの香奩体の詩を最も気の利いた物だと思ふ位の事であつた。僕も花月新誌の愛読者であつたから、記憶してゐる。西洋小説の翻訳と云ふものは、あの雑誌が始めて出したのである。なんでも西洋の或る大学の学生が、帰省する途中で殺される話で、それを談話体に訳した人は神田孝平さんであつたと思ふ。それが僕の西洋小説と云ふものを読んだ始であつたやうだ。さう云ふ時代だから、岡田の文学趣味も漢学者が新しい世間の出来事を詩文に書いたのを、面白がつて読む位に過ぎなかつたのである。

僕は人附合ひの余り好くない性であつたから、学校の構内で好く逢ふ人にでも、用事がなくては話をしない。同じ下宿屋にゐる学生なんぞには、帽を脱いで礼をするやうなことも少かつた。それが岡田と少し心安くなつたのは、古本屋が媒をしたのである。僕の散歩に歩く道筋は、岡田のやうに極まつてはゐなかつたが、脚が達者で縦横に本郷から下谷、神田を掛けて歩いて、古本屋があれば足を止めて

見る。さう云ふ時に、度々岡田と店先で落ち合ふ。「好く古本屋で出くはすぢやないか」と云ふやうな事を、どつちからか言ひ出したのが、親しげに物を言つた始である。

其頃神田明神前の坂を降りた曲角に、鉤なりに縁台を出して、古本を曝してゐる店があつた。そこで或る時僕が唐本金の瓶梅を見附けて亭主に値を問ふと、七円だと云つた。五円に負けてくれと云ふと、「先刻岡田さんが六円なら買ふと仰やいましたが、おことわり申したのです」と云ふ。偶然僕は工面が好かつたので言値で買つた。二三日立つてから、岡田に逢ふと、向うからかう云ひ出した。

「君はひどい人だね。僕が切角見附けて置いた金瓶梅を買つてしまつたぢやないか。」

「さう／＼君が値を附けて折り合はなかつたと、本屋が云つてゐたよ。君欲しいのなら譲つて上げよう。」

「なに。隣だから君の読んだ跡を貸して貰へば好いさ。」

僕は喜んで承諾した。こんな風で、今迄長い間壁隣に住まひながら、交際せずゐた岡田と僕は、往つたり来たりするやうになつたのである。

三

その頃から無縁坂の南側は岩崎の邸であつたが、まだ今のやうな巍々たる土塀で囲つてはなかつた。きたない石垣

が築いてあつて、苔蒸した石と石との間から、齒菜や杉菜が覗いてゐた。あの石垣の上あたりは平地だか、それとも小山のやうにでもなつてゐるか、岩崎の邸の中に這入つて見たことのない僕は、今でも知らないが、兎に角當時は石垣の上の所に、雄木が生えたい程生えて、育ちたい程育つてゐるのが、往来から根まで見えてゐて、その根に茂つてゐる草もめつたに蒔られることがなかつた。

坂の北側はけちな家が軒を並べてゐて、一番体裁の好いのが、板塀を繞らした、小さいした屋、その外は手職をする男なんぞの住ひであつた。店は荒物屋に烟草屋位しかなかった。中に往来の人の目に附くのは、裁縫を教へてゐる女の家で、昼間は格子窓の内に大勢の娘が集まつて為事をしてゐた。時候が好くて、窓を明けてゐるときは、我々学生が通ると、いつもべちやくちや盛んにしやべつてゐる娘共が、皆顔を挙げて往来の方を見る。そして又話をし続けたたり、笑つたりする。その隣に一軒格子戸を綺麗に拭き入れて、上がり口の叩きに、御影石を塗り込んだ上へ、折折方方に通つて見ると、打水のしである家があつた。寒い時は障子が締めてある。暑い時は竹簾が卸してある。そして為立物師の家の賑やかな為めに、此家はいつも際立つてひっそりしてゐるやうに思はれた。

此話の出来事のあつた年の九月頃、岡田は郷里から帰つ

て間もなく、夕食後に例の散歩に出て、加州の御殿の古い建物に、仮に解剖室が置いてあるあたりを過ぎて、ぶらぶら無縁坂を降り掛かると、偶然一人の湯帰りの女が彼為立物師の隣の、寂しい家に這入るのを見た。もう時候が大ぶ秋らしくなつて、人が涼みにも出ぬ頃なので、一人通り絶えた坂道へ岡田が通り掛かると、丁度今例の寂しい家の格子戸の前まで帰つて、戸を明けようとしてゐた女が、岡田の下駄の音を聞いて、ふいと格子に掛けた手を停めて、振り返つて岡田と顔を見合せたのである。

紺縮の単物に、黒繻子と茶献上との腹合せの帯を締めて、織い左の手に手拭やら石鹼箱やら糠袋やら海綿やらを、細かに編んだ竹の籠に入れたのを懈げに持つて、右の手を格子に掛けた儘振り返つた女の姿が、岡田には別に深い印象をも与へなかつた。併し結び立ての銀杏返し鬚が蟬の羽のやうに薄いのと、鼻の高い、細長い、稍寂しい顔が、この加減が額から頬に掛けて少し扁たいやうな感じをさせるのとが目に留まつた。岡田は只それ丈の刹那の知覚を閱歴したと云ふに過ぎなかつたので、無縁坂を降りてしまふ頃には、もう女の事は綺麗に忘れてゐた。

併し二日ばかり立つてから、岡田は又無縁坂の方へ向いて出掛けて、例の格子戸の家の前近く来た時、先きの日の湯帰りの女の事が、突然記憶の底から意識の表面に浮き出

したので、その家の方を一寸見た。堅に竹を打ち附けて、横に二段ばかり細く削つた木を渡して、それを蔓で巻いた肘掛窓がある。その窓の障子が一尺ばかり明いてゐて、卵の殻を伏せた万年青の鉢が見えてゐる。こんな事を、幾分かの注意を払つて見たために、歩調が少し緩くなつて、家の真ん前に来掛かるまでに、数秒時間の余裕を生じた。

そして丁度真ん前に来た時に、意外にも万年青の鉢の上の、今まで鼠色の闇に鎖されてゐた背景から、白い顔が浮き出した。しかもその顔が岡田を見て微笑んでゐるのであつた。

それからは岡田が散歩に出て、此家の前を通る度に、女の顔を見ぬことは殆ど無い。岡田の空想の領分に折々此女が闖入して来て、次第に我物顔に立ち振舞ふやうになる。女は自分の通るのを待つてゐるのだらうか、それともなんの意味もなく外を見てゐるので、偶然自分と顔を合せることになるのだらうかと云ふ疑問が起る。そこで湯帰りの女を見た日より前に溯つて、あの家の窓から女が顔を出してゐたことがあつたか、どうかと思つて考へて見るが、無縁坂の片側町で一番騒がしい為立物師の家の隣は、いつも綺麗に掃除のしてある、寂しい家であつたと云ふ記念の外には、何物も無い。どんな人が住んでゐるのだらうかと疑つたことは慥かにあるやうだが、それさへなんとも解決が附か

なかつた。どうしてもあの窓はいつも障子が締まつてゐたり、簾が降りてゐたりして、その奥はひっそりしてゐたやうである。さうして見ると、あの女は近頃外に氣を附けて、窓を開けて自分の通るのを待つてゐることになつたらしいと、岡田はとう／＼判断した。

通る度に顔を見合せて、その間々にはこんな事を思つてゐるうちに、岡田は次第に「窓の女」に親しくなつて、二週間も立つた頃であつたか、或る夕方例の窓の前を通る時、無意識に帽を脱いで礼をした。其時微笑い女の顔がさつと赤く染まつて、寂しい微笑の顔が華やかな笑顔になつた。それからは岡田は極まつて窓の女に礼をして通る。

参

岡田は虞初新誌が好きで、中にも大鉄椎伝は全文を誦誦することが出来る程であつた。それで余程前から武芸がして見たいと云ふ願望を持つてゐたが、つひ機会が無かつたので、何にも手を出さずにゐた。近年競漕をし始めてから熱心になり、仲間へ推されて選手になる程の進歩をしたのは、岡田の此一面の意志が發展したのであつた。

同じ虞初新誌の中に、今一つ岡田の好きな文章がある。それは小青伝であつた。あの伝に書いてある女、新しい詞で形容すれば、死の天使を閻の外に待たせて置いて、徐か

に脂粉の粧を凝すとても云ふやうな、美しさを性命にしてゐるあの女が、どんなにか岡田の同情を動かしたであらう。女と云ふものは岡田のためには、只美しい物、愛すべき物であつて、どんな境遇にも安んじて、その美しさ、愛らしさを護持してゐなくてはならぬやうに感ぜられた。それには平生香奩体の詩を読んだり、sentimentalな、fataleな、romanticな明清の所謂才人の文章を読んだりして、知らず識らずの間にその影響を受けてゐた為めもあるだらう。

岡田は窓の女に会釈をするやうになつてから余程久しくなつても、其女の身の上を探つて見ようともしなかつた。無論家の様子や、女の身なりで、困物だらうとは察した。併し別段それを不快にも思はない。名も知らぬが、強ひて知らうともしない。標札を見たら、名が分かるだらうと思つたこともあるが、窓に女のゐる時は女に遠慮をする。さうでない時は近処の人や、往来の人の人目を憚る。とうとう底の蔭になつてゐる小さい木札に、どんな字が書いてあるか見ずにゐたのである。

肆

窓の女の種姓は、実は岡田を主人公にしないでならぬ。此話の事件が過去に属してから聞いたのであるが、都合上ここでざつと話すことにする。

まだ大学医学部が下谷にある時の事であつた。灰色の瓦を漆喰で塗り込んで、碁盤の目のやうにした壁の所々に、腕の太さの木を堅に並べて嵌めた窓の明いてゐる、藤堂屋敷の門長屋が寄宿舎になつてゐて、学生は其中で、ちと気の毒な申分だが、野獣のやうな生活をしてゐた。勿論今はあんな窓を見ようと思つたつて、僅かに丸の内の櫓に残つてゐる位のもので、上野の動物園で獅子や虎を飼つて置く檻の格子なんぞは、あれよりは遙かにきやしやに出来てゐる。

寄宿舎には小使がゐた。それを学生は外使に使ふことが出来た。木白綿の兵児帯に、小倉袴を穿いた学生の買物は、大抵極まつてゐる。所謂「羊羹」と「金米糖」とである。羊羹と云ふのは焼手、金米糖と云ふのはじけ豆であつたと云ふことも、文明史上の参考に残して置く価値があるかも知れない。小使は一度の使賃として二銭貰ふことになつてゐた。

この小使の一人に末造と云ふのがゐた。外のは鬚の栗の殻のやうに伸びた中に、口があんごり開いてゐるのに、此男はいつも綺麗に剃つた鬚の痕の青い中に、脣が堅く結ばれてゐた。小倉服も外のは汚れてゐるに、此男のはさつぱりしてゐて、どうかすると唐棧か何かを着て前掛をしてゐるのを見ることがあつた。

僕にいつ誰が始めて噂をしたか知らぬが、金がない時は末造が立て替へてくれると云ふことを僕は聞いた。勿論五十銭とか一円とかの金である。それが次第に五円貸す十円貸すと云ふやうになつて、借る人に証文を書かせる、書替をさせる。とう／＼一人前の高利貸になつた。一体元手はどうしたのか。まさか二銭の使賃を貯蓄したのでもあるまいが、一匹の人間が持つてゐる丈の精力を一事に傾注すると、實際不可能な事はなくなるかも知れない。

兎に角学校が下谷から本郷に遷る頃には、もう末造は小使ではなかつた。併しその頃池の端へ越して来た末造の家へは、無分別な学生の出入が絶えなかつた。

末造は小使になつた時三十を越してゐたから、貧乏世帯ながら、妻もあれば子もあつたのである。それが高利貸で成功して、池の端へ越してから後に、醜い、口やかましい女房を懐く思ふやうになつた。

その時末造が或る女を思ひ出した。それは自分が練堀町の裏からせまい露地を抜けて大学へ通勤する時、折々見たことのある女である。どぶ板のいつもこはれてゐるあたりに、年中戸が半分締めてある、薄暗い家があつて、夜その前を通つて見れば、簷下に車の附いた屋台が挽き込んであるので、さうでなくとも狭い露地を、体を斜にして通らなくてはならない。最初末造の注意を惹いたのは、此家に稽

古三味線の音のすることであつた。それからその三味線の音の主が、十六七の可哀らしい娘だと云ふことを知つた。

貧しさうな家には似ず、此娘がいつも身綺麗にして、着物も小ざつぱりとした物を着てゐた。戸口にゐても、人が通るとすぐ薄暗い家の中へ引つ込んでしまふ。何事にも注意深い性質の末造は、わざ／＼探るともなしに、此娘が玉と云ふ子で、母親がなくて、親爺と二人暮らしでゐると云ふ事、その親爺は秋葉の原に飴細工の床店を出してゐると云ふ事などを知つた。そのうちに此裏店に革命の変動が起つた。例の簷下に引き入れてあつた屋台が、夜通つて見てもなくなつた。いつもひっそりしてゐた家とその周囲とへ、当時の流行語で言ふと、開化と云ふものが襲つてでも来たのか、半分こはれて、半分はね返つてゐたどぶ板が張り替へられたり、入口の模様替が出来て、新しい格子戸が立てられたりした。或る時入口に靴の脱いであるのを見た。それから間もなく、此家の戸口に新しい標札が打たれたのを見ると、巡查何の何某と書いてあつた。末造は松永町から仲徒町へ掛けて、色々な買物をして廻る間に、又探るともなしに、飴屋の爺いさんの内へ婿入のあつた事を憶めた。標札にあつた巡查がその婿なのである。お玉を目の球よりも大切にしてゐた爺いさんは、こはい顔のおまはりさんに娘を渡すのを、天狗にでも撈はれるやうに思ひ、その婿殿

が自分の内へ這入り込んで来るのを、此上もなく窮屈に思つて、平生心安くする誰彼に相談したが、一人もことわつてしまへとはつきり云つてくれるものがなかつた。それ見た事か。こつちとらが宜い所へ世話をしようと思ふのに、一人娘だから出されぬのなんと、面倒な事を言つてゐて、とう／＼そんなことわり憎い壻さんが来るやうになつたと云ふものもある。お前方の方で厭なのなら、遠い所へでも越すより外あるまいが、相手がおまはりさんで見ると、すぐにどこへ越したと云ふことを調べて、その先へ掛け合ふだらうから、どうも逃げ果せることは出来まいと、威すやうに云ふものもある。中にも一番物分かりの好いと云ふ評判のお上さんの話がかうだ。「あの子はある好い器量で、お師匠さんも芸が出来さうだと云つて褒めてお出だから、早く芸者の下地子にお出しと、わたしがさう云つたぢやありませんか。一人もののおまはりさんと来た日には、一軒一軒見て廻るのだから、子柄の好いのを内に置くと、いやおうなしに連れて行つてしまひなさる。どうもさう云ふ方に見込まれたのは、不運だとあきらめるより外、為方がないね」と云ふやうな事を言つたさうだ。末造が此噂を聞いてから、やつと三月ばかりも立つた頃であつたらう。船細工屋の爺いさんの家に、或る朝戸が締まつてゐて、戸に「貸屋差配松永町西のはづれにあり」と書いて張つて

あつた。そこで又近所の噂を、買物の序に聞いて見ると、おまはりさんには国に女房も子供もあつたので、それが出し抜けに尋ねて来て、大騒ぎをして、お玉は井戸へ身を投げると云つて飛び出したのを、立聞をしてゐた隣の上さんがやう／＼止めたと思ふことであつた。おまはりさんが壻に来ると云ふ時、爺いさんは色々の人に相談したが、その相談相手の中には一人も爺いさんの法律顧問になつてくれるものがなかつたので、爺いさんは戸籍がどうなつてゐるやら、どんな届がしてあるやら、一切無頓着でゐたのである。巡査が髭を拈つて、手続は万事己がするから好いと云ふのを、少しも疑はなかつたのである。その頃松永町の北角と云ふ雑貨店に、色の白い円顔で腮の短い娘がゐて、学生は「願なし」と云つてゐた。この娘が末造にかう云つた。「本当にたあちゃんはお哀さうでございますわねえ。正直な子だもんですから、全くなのお壻さんだと思つてゐたのに、おまはりさんの方では、下宿したやうな積になつてゐたと云ふのですもの」と云つた。坊主頭の北角の親爺が傍から口を出した。「爺いさんも気の毒ですよ。町内のお方にお恥かしくて、此儘にしてはゐられないと云つて、西島越の方へ越して行きましたよ。それでも子供衆のお得意のある所でなくては、元の商売が出来ないと云ふので、秋葉の原へは出てゐるさうです。屋台も一度売つてしまつて、佐久

間町の古道具屋の店に出てゐたのを、わけを話して取り返したと云ふことです。そんな事やら、引越やらで、随分掛かつた筈ですから、さぞ困つてゐますでせう。おまはりさんが国の女房や子供を干し上げて置いて、大きな顔をして酒を飲んで、上戸でもない爺いさんに相手をさせてゐた間、まあ、一寸楽隠居になつた夢を見たやうなものですな」と、頭をつるりと撫で、云つた。それから後、末造は飴屋のお玉さんの事を忘れてゐたのに、金が出来て段々自由が利くやうになつたので、ふいと又思ひ出したのである。

今では世間の広くなつてゐる末造の事だから、手を廻して西島越の方を尋ねさせて見ると、柳盛座の裏の車屋の隣に、飴細工屋の爺いさんのゐるのを突き留めた。お玉も娘でゐた。そこで或る大きい商人が妾に欲しいと云ふがどうだと、人を以て掛け合ふと、最初は妾になるのはいやだと云つてゐたが、おとなしい女だけに、とう／＼親の爲めだと云ふので、松源で檀那にお目見えをすると云ふ処まで話が運んだ。

伍

金の事より外、何一つ考へたことのない末造も、お玉のありかを突き留めるや否や、まだ先方が承知するかせぬか知れぬうちに、自分で近所の借家を捜して歩いた。何軒も

見た中で、末造の氣に入つた店が二軒あつた。一つは同じ池の端で、自分の住まつてゐる福地源一郎の邸宅の隣と、その頃名高かつた蕎麦屋の蓮玉庵との真ん中位の処で、池の西南の隅から少し蓮玉庵の方へ寄つた、往来から少し引つ込めて立てた家である。四つ目垣の内に、高野槇が一本とちやば檜葉が二三本と植ゑてあつて、植木の間から、竹格子を打つた肘懸窓が見えてゐる。貸家の札が張つてあるので這入つて見ると、まだ人が住んでゐて、五十ばかりの婆あさんが案内をして中を見せてくれた。その婆あさんが問はずがたりに云ふには、主人は中国辺の或る大名の家老であつたが、廃藩になつてから、小使取りに大蔵省の属官を勤めてゐる。もう六十幾つとかになるが、綺麗好きで、東京中を歩いて、新築の借家を捜して借りるが、少し古びて来ると、すぐ引き越す。勿論子供は別になつてしまつてから久しくなるので、家を荒すやうな事はないが、どうせ住んでゐるうちに古くなるので、障子の張替もしなくてはならず、畳の表も換へなくてはならない。そんな面倒になる丈せぬやうにして、さつさと引き越すのだと云ふのである。婆あさんはそれが厭でならぬので、知らぬ人にも夫の壁訴訟をする。「この内なんぞもまだこんなに綺麗なのに、もう越すと申すのでございますよ」と云つて、内ちゆうを細かに見せてくれた。どこからどこまで、可なり綺麗に掃

除がしてある。末造は一寸好いと思つて、數金と家賃と差配の名とを、手帳に書き留めて出た。

今一つは無縁坂の中程にある小家である。それは札も何も出てゐなかつたが、売りに出たのを聞いて見に行つた。持主は湯島切通しの質屋で、その隠居がつひ此間まで住んでゐたのが亡くなつたので、婆あさんは本店へ引き取られたと云ふのである。隣が裁縫の師匠をしてゐるので、少し騒がしいが、わざ／＼隠居所に木なんぞを選ん立てたものゆゑ、どことなく住心地が好ささうである。入口の格子戸から、花崗石を塗り込めた敲きの庭まで、小ざつぱりと奥床しげに出来てゐる。

末造は一晚床の上に寝転んで、二つの中どれにしようかと考へた。傍には女房が子供を寐かさうと思つて、自分も一しよに寐入つてしまつて、大きな口を開いて、女らしくない鼾をしてゐる。亭主が夜貸金の利廻しを考へて、いつまでも眠らずにゐるのは常の事なので、女房は何時まで亭主が目を開いてゐようが、少しも氣になんぞはせぬのである。末造は腹のうちで可笑しくて溜まらない。考へつつ女房の顔を見て、かう思つた。「まあ、同じ女でもこんな面をしてゐるものもある。あのお玉は大ぶ久しく見ないが、あの時はまだ子供上がりであつたのに、おとなしい中に意氣な処のある、震ひ附きたいやうな顔をしてゐた。さぞ此頃

は女振を上げてゐるだらうな。顔を見るのが楽しみだな。かあ奴。平氣で寐てけつかる。己だつて、いつも金のことばかり考へてゐるのだと思ふと、大違ひだぞ。おや。もう蚊が出やがつた。下谷はこれだから厭だ。そろ／＼蚊屋を吊らなくちゃあ、かあは好いが、子供が食はれるだらう。」こんな事を思つては、又家の事を考へて見る。どうか、かうか断案に到着したらしく思つたのは、一時過ぎであつた。それはかうである。「あの池の端の家は、人は見晴しがあつて好いなんぞと云ふかも知れないが、見晴しは此家で沢山だ。家賃が安いが、借家となると何やかや手が掛かる。それになんとかなく開け広げたやうな場所で、人の目に着きさうだ。うつかり窓でもあけてゐて、子供を連れて仲町へ出掛けるかかあにでも見られようものなら面倒だ。無縁坂の方は陰氣なやうだが、學生が散歩に出て通る位より外に、人の余り通らない処になつてゐる。一時に金を出して買ふのはおつくうなやうだが、木道具の好いのが使つてあるわりに安いから、保険でも附けて置けばいつ売ることになつても元値は取れると思つて安心してゐられる。無縁坂にしよう、しよう。己が夕方になつて、湯にでも行つて、氣の利いた支度をして、かかあに好い加減な事を言つて、だまくらかして出掛けるのだな。そしてあの格子戸を開けて、ずつと這入つて行つたら、どんな塩梅だらう。